

ホーソン作品にみる楽園の崩壊

—『ブライズデイル・ロマンス』と『大理石の牧神』を中心に—

大野 里枝

ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) は、楽天的な超越主義の盛んな時代に絶えず人間に対し懐疑の念を持ち続け、暗い人間の内面を描き「罪」について言及している。「罪」の多くは人間の現実と「死」により生じ、その後の苦悩を通し光が見いだされる。「死」は対極にある楽園、つまり生の幻像である理想郷アルカディアに崩壊をもたらす。楽園の崩壊により「死」に象徴される罪や悪を認識し、精神的に生まれ変わりその中で生き抜く人間の真実を根底に表現しているのは明白だ。これは彼の核となるテーマの一つであるが、背景に生と死に対する自身の心の真実を探りながら真義をも追及する姿も垣間見える。また「生」に対しどうあるべきか模索する様子も見受けられ、年齢が増すごとに渴望や焦燥という形に変化していくように思われる。本発表では、自身とも言える語り手の視点を通して楽園が「死」により闇に包まれる様を描いた『ブライズデイル・ロマンス』 (*The Blithedale Romance*, 1852) と楽園と死が色濃く描かれる『大理石の牧神』 (*The Marble Faun*, 1860) を中心に、彼の描く「楽園の崩壊」から真の創作意図を検証したい。同時に、実生活や心境を照らし合わせることで、晩年に至るにつれホーソンの描き出す理想郷に込められた心情もある種「崩壊」し変化していく推移を考察していきたい。

フランソワ・ジェラルール《ダフニスとクロエ》(1825年)について

安室 可奈子

現在ルーヴル美術館に所蔵されているフランソワ・ジェラルール《ダフニスとクロエ》は、ブルボン王政復古期、1824年のサロンへの出品を目的として描かれた油彩画である。実際には1825年に完成した。同年3月、ルイ18世に代わり即位した直後のシャルル10世が買い上げている。

本作品については、1983年のムーランの論文「フランソワ・ジェラルールの作品におけるダフニスとクロエ」が先行する唯一の研究である。一方、画家は1800年、ピエール・ディドが刊行した挿絵本のために、6点の「ダフニスとクロエ」の挿絵を描いている（プリュードンも3点制作）。本発表では、このムーラン論文の成果を基礎にしつつ、ダフニスとクロエの図像伝統を絵画と挿絵の両面から分析し、ジェラルール作品をそこに位置づけて論じる。本作品の考察を通じて、新古典主義美術の中に早くから芽生えていたロマン主義的傾向にささやかながらも新たな光を当てたいと思う。

“I washed my face and hands”—『ピグマリオン』における〈視線〉

松本 望希

バーナード・ショー（1856-1950）の『ピグマリオン』（*Pygmalion*, 1912）は、粗野な言葉で話す花売り娘イライザが、音声学者ヒギンズのレッスンを通して上流階級の英語を身につけていく過程を描く。6 か月間の音声学のレッスンにより、彼女は、大使館のパーティーで標準的なアクセントを話すだけでなく公爵夫人のように振舞うことに成功した。だが、上品な英語を身につけると交換に、彼女は逆説的に自らの主体性を失い、元の花売り娘には戻れなくなってしまう。ここで本発表が注目したいのは、『ピグマリオン』において、イライザの行動を規定する、「視線」の存在である。貧しい花売り娘であった彼女は、ヒギンズに下層階級の人間として「見られる」ことに対して敏感であり、必死に自らの出自を隠そうとして体裁を取り繕おうとするのである。彼女の変身を通して、物語の中に登場する「見られる」、あるいは「見る」ことに関する描写に注目する。

3 項動詞 provide の構造パターンにおける意味の差異について

今 佑介

動詞 provide は「与える」の意味を持つ動詞で、基本的に(1)のように「動詞+目的語+

前置詞句」のパタンの構造を用いる。

(1) We must provide them with something to sell.

(2) We should provide them ham and stuff.

(1)のように前置詞 with を用いた構造以外にも前置詞 to, for を用いた構造もある。しかし、(2)のように「動詞+間接目的語+直接目的語」、つまり二重目的語構文もアメリカ英語においては容認されている辞書等もある。しかし、現代英語の辞書や文法書でも「略式のアメリカ英語でまれである」と記載がある程度である。

小西(1980)は動詞 provide の二重目的語構文について、前置詞 with を用いた構文において with が省略されたものだとしている。しかし、磯(2017)は語用論的考察から前置詞 with を用いた構文と二重目的語構文には何らかの違いがあり、それに影響を受けて使用が異なる可能性があるとは指摘している。このように前置詞 with を用いた構文と二重目的語構文が同じ意味の構文であるかどうかは研究者によって意見が異なる。

本発表では先行研究とコーパスをもとに、動詞 provide のそれぞれの構文パターンが持つ含意的な意味の差異、及び二重目的語構文と前置詞が生起した構文について意味の差異があるのか考察する。

講演要旨

「図書館から拡張する読者ネットワーク～19世紀ノッティンガム」

イギリスの文学環境の成長は様々な図書施設とともにあった。18世紀から19世紀においては、その中核は営利目的の貸本屋（Circulating Library）であるが、会員制有料図書館（Subscription Library）もまた重要である。会員制有料図書館は非営利なので、各図書館で異なる会員の嗜好に応じて蔵書を形成しており、利益優先の貸本屋よりも、現在の公共図書館に近いものである。

会員制有料図書館の中には、会員記録や蔵書記録が残っていることもあり、会員読者についての調査とそれに基づく読者ネットワークの状況、定期刊行物や文学作品の傾向、入手先としての貸本屋や書籍商との関係等の各種分析によって、その地域の図書館を核とする読者コミュニティの広がりを明らかにできる。

今回は、1816年の開館から205年を経て、未だに現役の図書館として稼働しているノッティンガムのブロムリー・ハウス（Bromley House）の事例をとりあげ、各種記録の分析と先行研究をもとにして、読者コミュニティと文学について論じる。